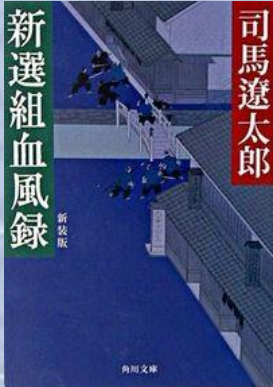


## 今回のテーマは「幕末」

大河ドラマでもよく描かれる動乱の時代、幕末。

京都も舞台となり、新選組や坂本龍馬など多くの有名な人物が生きた時代でもあります。

今回紹介する本には、そんな変わりゆく時代を懸命に生きた者たちが描かれます。



## 新選組血風録

司馬 遼太郎 / 著

KADOKAWA

新選組を題材とした物語が15編収録された短編集です。近藤勇や土方歳三を軸に、架空の人物も登場し、新選組を詳しく知らなくても十分楽しめる内容となっています。

新選組には、義を貫いた男たちのイメージがある一方で、粛清や切腹といった冷酷で野蛮なイメージもあります。現代から見ると、人を斬っていた集団であり、理解しがたい存在のようにも感じますが、それでも中にいた人々は人間らしい感情を持っていたということがこの本からは伝わってきます。例えば、沖田の恋する姿を描いた「沖田総司の恋」では、彼の新たな人物像に魅力を感じることができるでしょう。

命の駆け引きをする新選組の隊士にとって、人としての感情は時に不要なもの。なぜならその感情が自分や組織を危険にさらす可能性があるからです。死と隣り合わせにいるからこそ、日常がより尊いものであると受け止める、武士として生きようと覚悟した者たちの「人間らしさ」を感じることができるでしょう。

としまろ

## 吉田稔麿 松陰の志を継いだ男

一坂 太郎 / 著

KADOKAWA



山口県萩市に生まれ、16歳から松下村塾で吉田松陰の教えを受けた吉田稔麿は、塾の中で高杉晋作、久坂玄瑞とともに秀でた存在であり、松陰の期待を背負っていました。ですが24歳という若さで、池田屋事件にて命を落とします。ドラマや小説では、池田屋に乗り込んだ新選組と戦い、討たれる志士としてドラマチックに描かれますが、実際の彼はどのような人物だったのでしょうか？この本では様々な考察がなされています。

稔麿は、情報収集や分析能力に長けていました。幕臣や大名屋敷に出入りする者に接近し情報を引き出すなど、その手法は高杉晋作には真似が出来なかったと言われていました。稔麿が松陰にあてた手紙は、新聞や風聞書と言ってもいいくらい、さまざまな情報が正確に記されていました。繰り返す「飛耳長目(ひじちょうもく)」(情報収集)が重要だと説いていた松陰にとって稔麿は、その教えを忠実に実行していた門下生だったのです。松陰は稔麿のことを「その才を愛している」と語っているほどです。

稔麿は日本の未来を案ずる「志」と、下級武士の身分から這い上がろうとする「野心」とを抱いていました。動乱の時代に果てた彼の魅力あふれる人物像について深く知ることができる一冊です。